

E-29 働く婦人の生活に関する実態調査 才2報 乳児をもつ母親の疲労に
名古屋大 棚橋昌子, 愛知大 中田照子 ついて
愛知教育大 野田満智子 高橋春子

目的 乳児をもって働く婦人においては、仕事・家事・育児などの負担が重なり、疲労が蓄積されることが予想される。そこで、本報では、この時期の母親に自覚症状調査を行ない、その疲労の実態を明らかにしようと試みた。

方法 調査時期は、1978年12月であり、調査対象は名古屋市内の無認可保育所に乳児を預けて働く母親であり、自記式アンケート調査による。回答数は332名（回収率75.8%）であった。自覚症状調査は、I群身体的疲労（10項目）、II群精神的疲労（10項目）、III群身体的違和感（10項目）から成り、平日の朝起床時と夜就寝時に記入を依頼した。

結果 1.朝症状がなく夜症状のあるものを一日の疲労とみなすと、一日の疲労として訴え率の高い（30%以上）項目は、I群では「横になりたい」（53%）、「目がかかれる」（45%）、「足がだるい」（38%）、「全身がだるい」（32%）であり、II群では「いらいらする」（40%）、「根気がなくなる」（35%）であり、III群では「肩がこる」（40%）、「腰がいたい」（30%）である。2.朝すでに症状があり夜も症状のあるものを蓄積された疲労とみなすと、蓄積疲労として訴え率の高い（20%以上）項目は、I群では「ねむい」（42%）、「あくびが出る」（21%）であり、II群では該当項目はなく、III群では「肩がこる」（24%）である。3.これらの項目について、母親側の要因として年令・職業・収入・学歴など、子側の要因として子供数・末子の年令など、家庭側の要因として家族形態・夫の職業・夫の協力などをとりあげ、総合的な分析を試みた。